The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

大乗仏教在家起源説再考
――『般舟三昧経』の八菩薩と十六正士を中心に――

田　中　公　明

1．はじめに

筆者は，曼荼羅やパタ（軸装仏画）を中心にインド密教の歴史を研究し，その成果は『インドにおける曼荼羅の成立と発展』（春秋社，2010）にまとめられた．その過程で，曼荼羅やパタに描かれる菩薩には，主として二系統あることに気づいた．その一つは文殊・観音などの教理的に重要な大菩薩であり，これらは後に八大菩薩・十六大菩薩などの尊格群を形成し，曼荼羅の内院や中央軸線上など，重要な位置に配されるようになった．

これに対して曼荼羅の外院，胎蔵曼荼羅の第三重や金剛界曼荼羅の外院は，密教聖典とは関係の薄い菩薩群から構成されている．そして，これら外院に配される菩薩群は，先行する大乗仏典や初期陀羅尼経典の対告衆と関係が深いことが分かった[1)]．その中でも注目に値するのは，大品系の『般若経』と『文殊支利普超三昧経』の対告衆である．

そして『大品般若』の対告衆のうち，冒頭に挙げられる颰陀婆羅 Bhadrapāla（賢護）以下の十六尊は，「十六正士 satpuruṣa」[2)] という名称で，他の大乗仏典に数多く登場することが分かった．そしてこの十六正士は，『般舟三昧経』の八菩薩から発展したことが，先行研究によって明らかにされている．そこで今回は，『般舟三昧経』の八菩薩と十六正士を中心に，その意味を考えてみたい．

2．『般舟三昧経』の八菩薩

観仏経典の先駆とされる『般舟三昧経』は，漢訳仏典中でも最古のテキストの一つである．また同経に説かれる八人の菩薩は，颰陀和がラージャグリハ，羅隣那竭 Ratnākara がヴァイシャーリーというようにインド各地に定住する在家居士であり，従来から在家仏教的な背景をもって成立したと推定されてきた．この八菩薩について，平川彰博士は，「これらの長者がそのまま歴史的実在であったの

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ではなかろうが，しかし長者が経典の中で大きな役割を果たしていることは，在家菩薩で深い悟りに達した人びとが実際に存在したためであろう」[3] と述べている．いっぽう『八陽神呪経』では，経典末尾に，これらの「八菩薩名」が唐突に挙げられ，「是八人求道以来其劫無数．今未取佛．是八人本倶學道時．倶願八方上下人民皆共使得佛.」[4]，『灌頂経』巻八にも「此諸菩薩有大誓願．於我滅後五濁世中．救諸厄人」[5] と説かれ，『般舟三昧経』では在家居士であった八菩薩が，大悲闡提の菩薩へと昇格したことを示している．そしてこの八菩薩が,「十六正士」と呼ばれる在家の菩薩群へと発展したのである．

3．『大智度論』の記述

『大品般若経』の対告衆については,『大智度論』巻七に興味深い記述がある[6]．それを要約すると，①菩薩には居家と出家の二種があるが善守 Bhadrapāla 等の十六菩薩は居家菩薩である．②颰陀婆羅以下の住処を明かすが，これは『般舟三昧経』に一致する．③観世音菩薩等は他方仏土から来た菩薩である．④もし偉大さの順に列すれば普賢・観音・得大勢等の大菩薩を先に挙げるべきで，逆であれば肉身初発意菩薩を先に挙げるべきであるが，善守は王舎城の住人であり，白衣（＝在家）の中では最も偉大であるから先に列したのである．⑤善守菩薩の無量の功徳については，仏自ら『般舟三昧』に説いている．

このように『大智度論』は，『大品般若経』の十六菩薩が『般舟三昧経』に由来することを自ら認めている．しかも観音・文殊・弥勒等の大菩薩を差し置いて，先に颰陀婆羅等の在家菩薩を列したのは，彼らが娑婆世界有縁の菩薩であり，『般若経』の正機であることを示すものといえよう．

4．八菩薩と十六正士を説く経典

『般舟三昧経』に由来する八人の在家菩薩と，それを増広した十六正士は,「十六大士」「十六丈夫衆」「十六賢士」「十六善大丈夫」「十六在家菩薩」等，訳語は様々であるが，前述の『般舟三昧経』『八陽神呪経』『灌頂経』以外に，少なくとも25篇の漢訳仏典（同本異訳を含む）に説かれることが分かった[7]．しかもこれらには一定の傾向があり，後漢から五胡十六国までに初訳された初期大乗・陀羅尼経典が多く，『華厳経』類を含まないという特徴がある．『華厳経』は仏成道の直後に説かれたとされ，まだ娑婆世界に在家信徒は存在しなかった．またその後は天界に説処を移すが，『般舟三昧経』の八菩薩は生身の人間であり，『華厳経』の

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

説処に列するには相応しくないと考えられたからであろう．また『賢劫経』は「颰陀和等八大正士」，『如幻三昧経』は「解縛之等八正士」と，十六正士に増広される前の古形を留めている．とくに『賢劫経』は，初期大乗の中でも古層に属するとされるが，なお『般舟三昧経』の影響が認められるのは注目に値する．

なお『法華経』では，梵本とチベット訳に16人のsatpuruṣaが列挙されるが，漢訳では欠いている．いっぽう『悲華経』では，梵本のみにsatpuruṣaが列挙される．これに対して『無量寿経』では，康僧鎧訳と『大宝積経』「無量寿如来会」に十六正士（丈夫衆）の記述があるが，ネパール系梵本・チベット訳には欠いている．これら十六正士の名を『般舟三昧経』の八正士と比較すると，『般舟三昧経』の須深（Susīma?）のみは早い段階で失われたが，他の七人は十六正士に継承されていることが分かる[8]．

筆者は長年，大乗仏典や密教聖典に説かれる尊格名を研究してきたが，大乗仏典に現れる固有名詞は経典間で差異が大きく，合致が見られる場合も散発的なのが常である．このように初期大乗経典に特定の菩薩群が共通して現れるのは稀であり，『般舟三昧経』の在家菩薩に特段の影響力があったと考えざるを得ない．

さらに八正士・十六正士を説かないが，賢護を単独で対告衆に列する大乗仏典に至っては枚挙にいとまがない．また同じ在家仏教的背景をもつとされる『維摩経』は，対告衆に八正士・十六正士を列せず，登場する菩薩も十六正士ではなく『文殊支利普超三昧経』の二十五正士に近いが，同経は，Ratnākaraというリッチャビ族の若者がブッダに宝蓋を献じ，讃辞を呈するシーンから開幕する．従来から，この冒頭部分は維摩居士の活躍を主題とする本経の構成上，不自然であるとの指摘がなされてきた．ところが『般舟三昧経』八菩薩のRatnākaraは，ヴァイシャーリーのリッチャビ族であるとされており，『維摩経』と一致する．このように『般舟三昧経』の八菩薩には，仏在世中から初期大乗仏典成立までの間に，インド各地で活躍した在家居士のイメージが反映していると思われる．

5．八人の在家菩薩の役割

三巻本「授決品」によると，般舟三昧は仏滅後四十歳にして失われると授記されている．そして仏滅度の後，正法隠滅・諸国相伐の時，この経典は仏の威神の故に現れ，颰陀和・羅隣那竭等の八菩薩が流布教授するとされる[9]．後の大乗仏典にも，しばしば類似の授記が見られるが，ここで注意しなければならないのは，『般舟三昧経』の八菩薩は，寿自在を成就した文殊・観音等の大菩薩ではないと

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

いうことである．彼らが『般舟三昧経』が再び世に現れる仏滅後五百歳[10]まで生きることはできず，ここでは当然，輪廻転生が意図されていると思われる．

いっぽう『般舟三昧経』の後半に説かれる複数のアヴァダーナでは，仏から般舟三昧を教示された衆生は，来世もまた般舟三昧を教授する善知識に巡り会い，この三昧を成就することができると説かれている．

したがって『般舟三昧経』の成立については，以下のようなプロセスが考えられる．同経の成立時代とされる紀元前後頃，ブッダを現前に観想するという般舟三昧を伝承する在家居士の集団があった．彼らはそのマニュアルとして，現在の「行品」[11]のような簡単なテキストを伝えていたが，これに仏説としての権威を与えるため，Evaṃ mayā śrutam ではじまり abhyanandann iti で終わる，仏経の体裁をとる経典の編纂を企てた．その時，彼らは，自らをブッダから直接この三昧を承けた颰陀和・羅隣那竭等の八人の在家菩薩の後身に擬し，このテキストが真経であることを主張したのである．

通常の仏経において，経典を付嘱されるのは阿難等の仏弟子である．ところが阿難に付嘱したのなら，結集の時に阿難によって誦されたはずであり，どうして小乗の三蔵に収められていないのかという疑問が生じる．そこで『般舟三昧経』は，阿難とは別に娑婆世界に住する八人の在家菩薩に本経を付嘱し，彼らが仏滅後四十歳にして失われた般舟三昧を，はるか五百年の後に再興するというプロットを案出したのである．そもそも在家居士は結集の場に参加する資格がないから，『般舟三昧経』が小乗の三蔵に収録されていなかったとしても問題はない．

三巻本「譬喩品」に出る「是の語は，是れ何等の説なるか，是れ何れより得る所なるか，是れ自ら合会することをなして是の語を作るのみ．この語は仏の所説にあらず」[12]との批判は，その後のインドで継続的に行われる大乗仏典の編集が，同経の成立時点では，きわめて稀であり，これを仏説と認めさせるハードルが高かったことを物語っている．

そしてこの，大乗仏典はブッダ説法の座に連なった在家菩薩によって伝えられたというプロットは，大品系の『般若経』に継承され，弥勒・観音等の大菩薩に先だって，颰陀婆羅等の十六人の在家菩薩を列するという逆転現象を引き起こした．さらにこのプロットは，対告衆として「八正士」や「十六正士」を列する，少なくとも25種の初期大乗・陀羅尼経典に引き継がれたと見ることができる．

しかし，このような在家菩薩名の列挙は第一次大乗仏典で終わり，それ以後は標準型の八大菩薩のように，高位の大菩薩のみが対告衆として言及されるように

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

なる．これは出家教団による大乗仏典の受容が一般化し，大乗仏典導入期に在家菩薩が果たした役割が忘れられたことによると思われる．そしてこれらの在家菩薩は，弥勒を上首とする賢劫菩薩に吸収され，娑婆有縁の菩薩として曼荼羅の外院に列することになったのである．

6．まとめ

本稿では，観仏経典の先駆とされる『般舟三昧経』に登場する八人の在家菩薩を中心に，草創期における大乗仏教と在家居士の役割について考察した．

大乗仏教の成立と在家仏教の関係については，平川彰博士による，あまりにも有名な仏塔崇拝起源説があり，学界を風靡して定説化していたが，近年では，これを批判し，旧来の部派の中から大乗仏典が生み出されたとの見解が主流となりつつある．平川博士は，『般舟三昧経』の八人の在家菩薩の存在に注意しながら，彼らについて詳細な検討を行なわなかった．これは平川博士が，大品系の『般若経』の対告衆が『般舟三昧経』を承けることを看過あるいは軽視し，『般若経』所説の百八三昧に般舟三昧が含まれないことをもって，『般舟三昧経』の成立を『大品般若経』より遅れる[13]としたことによると思われる．

いっぽう Paul Harrison 博士は，『般舟三昧経』の八菩薩と十六正士について正しい認識をもっていたが，『般舟三昧経』がその後のインド大乗仏教に与えた影響については，東アジア仏教への影響に比して遙かに小さいとした[14]．

これらの見解は，従来の研究者の関心が教理や宗教社会学的考察に偏り，尊格等の固有名詞に疎かったことによると思われる．本稿で明らかにしたように，対告衆等の固有名詞の比較は，大乗仏典間の参照関係や成立の前後を論じる上で，強力なツールとなりうるものである．これまでは，初期大乗仏典のサンスクリット原典は未発見・未刊のものが多く，漢訳やチベット訳から尊名の原語を類推するしかなかったが，アフガニスタンやチベットから新たなサンスクリット写本が発見されたことで，この状況はかなり改善されてきた．

今後，筆者が本稿で指摘した諸点が，大乗仏教の成立という困難な問題の解決に幾分たりとも資することを願っている．

1）金剛界曼荼羅の外院に配される賢劫十六尊は，『出生無辺門陀羅尼経』の対告衆と関係が深いことが明らかにされている．Hisao Inagaki, *The Anantamukhanirhāra Dhāraṇī Sūtra and Jñānagarbha's Commentary* (Kyoto: Nagata Bunshōdō, 1987), TABLE 3.

2）Satpuruṣa については，渡辺章悟「対告衆としての Satpuruṣa」（『東洋大学大学院紀要

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

[文学研究科]』第18集，1981）で詳しく考察されている．この中で渡辺氏は，satpuruṣa が必ずしも在家菩薩を意味しないことを指摘しているが，本稿の主題となる『般舟三昧経』の八菩薩は，経典の記述により在家であることが明らかなので問題はない．

3）平川彰『インド仏教史』上巻（春秋社，1974），p.396.

4）大正 No.429, Vol.14, 74a；No.428, Vol.14, 73a もほぼ同じ．

5）大正 No.1331, Vol.21, 517c.

6）大正 No.1509, Vol.25, 111a.

7）『大般若波羅蜜多經』第六分（大正 No.230）；『勝天王般若波羅蜜經』（同 No.231）；『大寶積經無量壽如來會』（同 No.310）；『大寶積經浄信童女會』（同 No.310）；『大寶積經無盡慧菩薩會』（同 No.310）；『大寶積經寶髻菩薩會』（同 No.310）；『護国尊者所問大乗經』（同 No.321）；『如幻三昧經』（同 No.342）；『無量壽經』（同 No.360）；『大阿弥陀經』（同 No.364）；『賢劫經』（同 No.425）；『除蓋障菩薩所問經』（同 No.489）；『持心梵天所問經』（同 No.585）；『思益梵天所問經』（同 No.586）；『勝思惟梵天所問經』（同 No.587）；『海龍王經』（同 No.598）；『菩薩瓔珞經』（同 No.656）；『華手經』（同 No.657）；『寶雲經』（同 No.658）；『大乗寶雲經』（同 No.659）；『寶雨經』（同 No.660）；『請觀世音消伏毒害陀羅尼呪經』（No.1043）『勝幢臂印陀羅尼經』（同 No.1363）；『妙臂印幢陀羅尼經』（同 No.1364）.

8）渡辺 1981，89 は，『無量寿経』の十六正士が『法華経』（梵本）と全く異なるとするが，小林良信「〈無量寿経〉の序分について（Ⅱ）」（『印仏研』37-1, 1988）が指摘したように『無量寿経』で賢護の後に列せられた15人には他土菩薩が含まれ，『無量寿如来会』では賢護の後が10人しかいないので，十六正士名を列挙したのではないと思われる．

9）大正 No.418, Vol.13, 911a.

10）この仏滅後五百歳という記述は，支婁迦讖訳の原型に近いとされる三巻本『般舟三昧経』に出ず，疑問が残るが，本経の推定成立年代ともほぼ合致する．

11）『般舟三昧経』の成立過程については，末木文美士博士の所説を参考にした．

12）Ibid., 907ab.

13）平川彰『初期大乗仏教の研究』（春秋社，1968），p.579.

14）Paul Harrison, *The Samādhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present, An Annotated English Translation of the Tibetan Version of the Pratyutpanna-Buddha-Saṃmukhāvasthita-Samādhi-Sūtra* (Tokyo: IIBS, 1990), xxii–xxiii.

（平成24年度科学研究費基盤研究（C）「アジア各地における密教図像と文献の比較研究」の成果の一部）

〈キーワード〉『般舟三昧経』，十六正士

（中村元東方研究所研究員）

NII-Electronic Library Service